



評論・随筆

兼常清佐

かね つね きよ すけ

萩市

(1885～1957)



提供・『未完の独奏』復刻本より 大空社

【著作】

『日本の言葉と唄の構造』(昭和13 岩波書店)
『兼常清佐遺作集』上下2巻(昭和35 兼常清佐遺作集刊行会)
『兼常清佐著作集』15巻+別巻1
(平成22 蒲生美津子ほか編・大空社) ほか

【閲覧情報】

萩市立萩図書館 08382516355

【参考文献】

『音楽格闘家 兼常清佐の生涯』(蒲生美津子・大空社)
『兼常清佐 萩が生んだ音楽界の奇才』
(三好健二 萩ものがたり)

音楽学者で文学博士の兼常清佐は明治十八年(1885)山口県阿武郡萩町土原(現・萩市土原)で萩藩に仕えた士族の家系に生まれた。

明倫尋常小学、旧制萩中学を経て旧制山口高(理科)、京都帝大哲学科および同大学院に進んだ。東京音楽学校の貫名美名彦(なみな)に師事しピアノを学んだ後、ドイツに留学し作曲と音響心理学を学んだ。大正十四年(1925)『日本ノ音楽ニ就テノ一観察』で京都帝大より博士号を授与された。

倉敷の大原孫三郎の援助を受けてドイツへ留学した。直前の三年間、東京本郷菊坂にある高等下宿屋・菊富士ホテルの住人であった。ここには錚々たる未来の文豪や思想家が、時期は異なるが共通の空間で、その秘めた才能の発酵・熟成を待っていた。谷崎潤一郎、宇野浩二、広津和郎、竹久夢二や大杉栄、三木清などである。瀬戸内晴美(寂聴)が『鬼の栖』で女主人の聞き書きとして兼常の逸話に触れている。

大正から戦前・戦中にかけての五十冊に及ぶ著作や数百におよぶ随筆・論文は音楽・文学、歴史、哲学や数学、物理、生物、心理学とアールからサイエンスまで多領域にわたり学際的である。その先進的な考えや彼独特のシニカルな発言は、真意が伝わり難く当時の楽壇や文壇から正当な評価を得られなかった。

戦後発表された仏文学者・桑原武夫の『第二芸術』論は、俳壇・歌壇に衝撃を与えた。兼常は、戦前に同様の批判を既に試みていた。『アラragi』の総帥で医者者の斎藤茂吉は腹に据えかね、同誌連載の『童馬山房夜話』で「兼常氏の歌壇評」に「統兼常」と二度にわたって触れ、鬱憤を晴らしているのは興味深い。兼常の著作に明星派の『石川啄木』と『与謝野晶子』の評伝がある。

業績の一つは、音響物理学による「ピアノの構造」についての研究である。成果を昭和十年(1935)『中央公論』に「音楽界の迷信」と題して発表した。これが新聞紙上に「ピアノスト無用論」のタイトルで取り上げられ、独り歩きした。『兼常清佐』の名前を、良い意味でも別の意味でも一躍有名にした。

兼常のライフワークは亡びゆく民謡を蒐集・保存して、科学的な装置を使って分析する研究で、成果の一端は『日本の言葉と唄の構造』に著された。柳田国男は民俗学の立場から、柴田南雄は民俗音楽の立場から兼常の研究を高く評価した。昭和三十二年(1957)『東大病院にて、在野で孤高の研究者は、途半ばにして七十一才の生涯を終えた。』(文・三好健二)

ピアノの先生はほとんど例外なしに言う。ーお前はタッチを勉強しなくてはいけない。ピアノの鍵盤の打ち方こそピアノの技術の真生命のあるところである。鍵盤の打ち方ひとつで音はいろいろに変わる。打ち方の上手な人の指からは、美しいピアノの音が出る。お前は手の形、指の形などを十分にピアノの音が出ると、先生の言うとおりに直して、いいタッチの出来るように勉強しなくてはならない。先生に習わないで自分一人てやったのでは、指や手の形がわるくて、ピアノの音が美しくない。ーこれが迷信である。常識で考えて見ても、そんな出鱈目な事があり得ようはずがない。パデレウスキーが叩いても、猫が上を歩いても、同じ鍵盤からは同じ音しか出ない。どの指で、どんな打ち方で叩こうと、そんな事は音楽の音とは別に何の関係もない。それはただ先生が御愛嬌にそんな事も言うて見るだけのものである。それを本当と思いきこんで、真面目になって、その通りをピアノの上でやって見ようとするのは、本気で考えると頗る馬鹿げた話である。それが迷信である。音楽はただ音楽である。楽器は楽器より以上の何物にもなり得ない。ピアノにはピアノで出来る以上の仕事は決して出来ない。私はこのお話で多少でも本当の事は迷信との間に境界線が引けたとしたならば、些くも私が朝夕弾いているこの一台のピアノだけは、非常にそれを喜んでくれるであろう。

(『中央公論』昭和十年1月号「音楽界の迷信」より抜粋)



直筆原稿 (萩博物館所蔵)

兼常清佐

年譜

(提供・三好健二)

明治18(一八八五年)	明治25(一八九二年)	明治29(一八九六年)	明治32(一八九九年)	明治36(一九〇三年)	明治38(一九〇五年)	明治39(一九〇六年)	明治40(一九〇七年)	大正2(一九一〇年)	大正3(一九一三年)	大正4(一九一四年)	大正6(一九一七年)	大正8(一九一九年)	大正9(一九二〇年)	大正11(一九二二年)	大正13(一九二四年)	大正14(一九二五年)	昭和2(一九二七年)	昭和3(一九二八年)	昭和4(一九二九年)	昭和5(一九三〇年)
七歳	一一歳	一四歳	一八歳	二〇歳	二二歳	二三歳	三二歳	三四歳	三五歳	三七歳	三九歳	四〇歳	四二歳	四三歳	四四歳	四五歳				

七歳	11月22日、山口県阿武郡萩町土原に出生。明倫尋常小学校入学。清佐の短歌が萩の短歌機関誌に載る。	昭和9（一九三四年）	四九歳
一歳	4月、明倫高等学校入学。	昭和10（一九三五年）	五〇歳
一四歳	9月、山口県萩中学校入学。		
一八歳	9月、旧制山口高等学校理科入学。		
二〇歳	山口高等商業学校大学预科3年に進級。		
二歳	7月、山口高等商業学校卒業。		
	10月8日、山口県立徳山中学校教員（物理・化学・数学）に奉職。		
二二歳	9月23日、京都帝国大学文科大学哲学科入学。	昭和11（一九三六年）	五一歳
二五歳	9月27日、京都帝国大学大学院入学。	昭和12（一九三七年）	五二歳
二八歳	10月5日、「日本の音楽」処女出版。	昭和13（一九三八年）	五三歳
二九歳	2月東京音楽学校邦楽調査掛嘱託となる。	昭和14（一九三九年）	五四歳
三〇歳	11月ピアノを東京音楽学校の貫名美名彦に師事。		
三二歳	7月11日、交詢社で「所謂日本の音楽とは」で講演。邦楽界に反発。	昭和16（一九四一年）	五六歳
三四歳	1月20日、東京音楽学校邦楽調査係を解嘱。	昭和18（一九四三年）	五八歳
三五歳	2月2日、本郷の菊富士ホテルに引越す。	昭和19（一九四四年）	五九歳
	12月16日、大阪楽友会で「ベートーベン生誕一五〇年記念」講演。	昭和22（一九四七年）	六二歳
	6月19日、心理学研究会で「ピアノ及びピアノ演奏」について講演。	昭和23（一九四八年）	六三歳
	7月18、19日、大阪で「新浪漫派の音楽家シヨパン」の題で講演。	昭和24（一九四九年）	六四歳
三七歳	2月1日、大原孫三郎の援助を受けドイツへ留学。	昭和25（一九五〇年）	六五歳
	6月2日、ベルリン大学聴講生登録。	昭和26（一九五一年）	六六歳
三九歳	4月1日、帰国神戸港着。	昭和27（一九五二年）	六七歳
四〇歳	2月25日、「音楽巡礼」（岩波書店）刊。	昭和28（一九五三年）	六八歳
	12月15日、京都帝大より文学博士号授与される。		
四二歳	3月25日、「ベートーベンの死」（岩波書店）刊。	昭和32（一九五七年）	七一歳
	10月25日、「音楽の話と唱歌集」（小学生全集67、興文社・文芸春秋社）	《没後》	
四三歳	11月25日、「平民学人シュペルト」（岩波書店）刊。	昭和35（一九六〇年）	
四四歳	1月30日、「音楽概論」（岩波書店）刊。酷評と支持評と反響を呼ぶ。	平成4（一九九二年）	
四五歳	2月1日、「音楽芸術の階級性について」（『改造』）。各界からの論争を呼ぶ。	平成22（二〇一〇年）	

7月1日、折口信夫、柳田国男率いる民族芸術の会に加わる。	10月11日、萩中寮歌へ誠之学会を数字譜で作曲。	3月13日、《萩市歌》を数字譜で作曲。	6月1日、「音楽の合理化」(『中央公論』。大宅壮一が兼常の勇気を絶賛。	1月1日、「音楽界の迷信」(『中央公論』。反響を呼ぶ。	6月1日、発表の真意が伝わらず「ピアノニストは何をするべきか」(『音楽倶楽部』)を追加発表。	6月15日、随筆集『音楽と生活』(岩波書店)刊。	6月16日、大原孫三郎の援助で日本音楽研究所開設、所長に就任。	6月10日、笠間稲荷神社の《田植祭歌》作詞 折口信夫)を作曲。	8月30日、随筆「残響」(岩波書店)刊。	3月30日、「日本の言葉と唄の構造」(岩波書店)刊。	1月20日、「日本語の研究」(中央公論社)刊。	4月21日、随筆「雨だれの音」(『東京日日新聞』夕刊)でアラギ派批判。	7月1日、内田百閒と「こんなにやく問答」(『文芸春秋』。斎藤茂吉が不快感。	6月5日、随筆集「よもやまばなし」(厚生閣)刊。	6月25日、「日本音楽と西洋音楽」(三笠書房)刊。	8月15日、「石川啄木」(三笠書房)刊。	7月10日、「中央公論」改造に廃刊命令。	6月30日、「音楽概論」(中山書店)再版。	8月20日、「与謝野晶子」(三笠書房)刊。	10月20日、「西洋音楽と日本音楽」(三笠書房)と書名を変え再版。	11月15日、自伝「未完の独奏」(志摩書房)刊。	3月1日、「鬼火と闘う恋人達」(社会思潮)。戦争の愚かさを訴える。	10月20日、「音・コトバ・文字・日本語の性質」(日本ローマ字会)刊。	3月30日、宮内玉子との共著「イギリスの詩 日本」の詩「北星堂書店」刊。	4月25日、東大病院にて死去。	11月『兼常清佐遺作集』上下2巻 (兼常清佐遺作集刊行会)	9月『音楽と生活 兼常清佐随筆集』(杉本秀太郎編 岩波書店)	1月『兼常清佐著作集』全15巻+別巻1 (蒲生美津子ほか編 大空社)完
------------------------------	--------------------------	---------------------	-------------------------------------	-----------------------------	--	--------------------------	---------------------------------	---------------------------------	----------------------	----------------------------	-------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------------------	--------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	-----------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------

菊富士ホテル止宿者石碑

(提供・三好健二)

兼常清佐